

ポーランドのヴェトナム人：移行期社会におけるインフォーマル・マーケットの空間的パターンの変化

山本， 茂

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2005-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004002>

ポーランドのヴェトナム人

～移行期社会における インフォーマル・マーケットの空間的パターンの変化～

山 本 茂

Keyword: Migration, Immigrant, Informal market, Bazaar, Eastern border, Illegal stay, Transborder trade, Ethnic minority, Vietnamese, Poland, Warsaw,

I はじめに

1989年以降のポーランドでは社会経済全般の変革と新しい社会経済システムへの移行が進められている。この変革と移行の社会過程に対する著者らの評価は基本的に肯定的であり、この計画経済から市場経済への転換という人類史上未踏のプロセスを緩慢ながらほぼ成功裏に推し進めているものと評価している（山本茂，ヤツェク・ヴァン，2004，p.90）。

社会経済システムの全般的な移行の過程でさまざまな新しい現象が噴出し地理学研究に多くの刺激を与えているが、そうした現象のひとつとして、国際的な人口移動、とくに移民（Immigrants）問題が注目される。これまでポーランドは歴史的に移民の送出国として新大陸やヨーロッパ各地に多数のコミュニティをつくってきたが、移行期社会ではぎゃくにポーランドが移民の受入国となり、新旧の少数民族の大量流入と新しいコミュニティ形成が進展している。また、国土の歴史的変遷から、第一共和制時代のポーランドは多民族国家であり国民のおよそ3分の1が異民族であった（表1および図1）。第二次世界大戦とその戦後処理の過程でポーランド国家の領域が大きく西にシフトしたため、中欧のこの地域では大規模な民族移動と居住地域の再編成がおこなわれた。現

表1 おもな少数民族の人口変化 (1931-1991)

[単位: 1,000人]

年	1931	1946	1961	1988	1991
全人口	32,100	23,400	29,800	38,640	38,640
ベラルーシ人	1,955-1,965	200	148	300	200-300
ウクライナ人	4,985-5,025	520-570	162	300	200-230
(うちルテニア人)	120-130	120-130	—	80	50-60
ロシア人	139-140	—	17	15	10-15
(うち分離派)	30-35	—	—	—	2.5-3
リトアニア人	186-200	10	9	30	20
ドイツ人	780-785	3,200-3,500	200	600	330-400
ユダヤ人	3,115-3,135	40-120	70	10-15	15
ロマ人	30-50	10-15	12	30	25
スロヴァキア人	0.8-0.9	—	19	25	20-23
チェコ人	39	—	2	—	2-3
アルメニア人	5.2	—	—	15	8
タタール人	5.5	—	—	4-5	3-4
カライム人	1.0-1.5	—	—	0.2	0.2
ギリシヤ・マケドニア人	—	—	9	5	5

(Krystyna Iglicka, 2000, p.6 一部修正)

代ポーランドの民族構成は人口3,822万(2003年)の97%がポーランド人であり、その他の少数民族はわずか3%前後というかなり均質的な国家といわれている。それでも、国家の領域と民族分布は一致するわけではなく、国境の両側に同一民族がコミュニティをつくりあうということは珍しいことではない。

現在進行している移民は、こうした事実を背景にポーランドに新しい問題を提起している。1989年以降、人びとの国境を越えた自由な移動が容易となった。近隣諸国、とくにポーランド東部の国境を越えて旧ソ連圏の国々に(ベラルーシ、ウクライナ、ロシア、リトアニア)からやってくる移民は、社会主義時代を通して国内に居住している少数民族集団とも近い人びとである。いっぽうで、そうした背景をもたないニューカマーとしてのヴェトナム人の到来は、ポーランドの大都市に新しい「貌」を与えている(表2)。

1989年以降に急増した新規の移民(入国・滞在者)の多くはポーランド各地でインフォーマル市場と関連した業務に参加している。全国各地に発達した

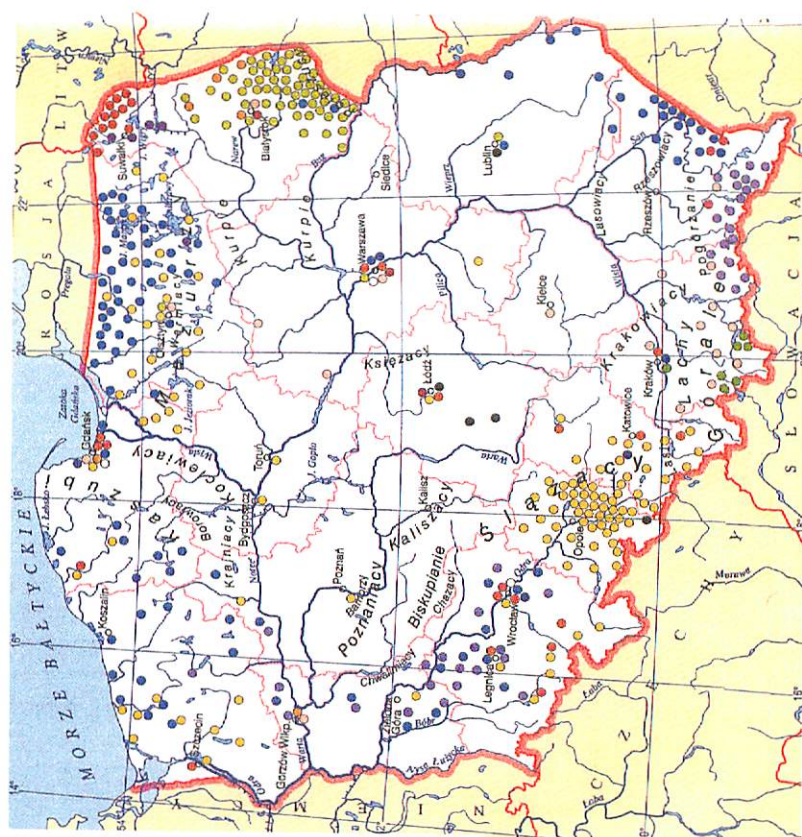


図1 少数民族の分布(1990)

Atlas Geograficzny 2003

- | 200-400 | 400-600 | 600-800 | 800-1000 | 1000-1200 | 1200-1400 | 1400-1600 | 1600-1800 | 1800-2000 | 2000-2200 | 2200-2400 | 2400-2600 | 2600-2800 | 2800-3000 | 3000-3200 | 3200-3400 | 3400-3600 | 3600-3800 | 3800-4000 | 4000-4200 | 4200-4400 | 4400-4600 | 4600-4800 | 4800-5000 | 5000-5200 | 5200-5400 | 5400-5600 | 5600-5800 | 5800-6000 | 6000-6200 | 6200-6400 | 6400-6600 | 6600-6800 | 6800-7000 | 7000-7200 | 7200-7400 | 7400-7600 | 7600-7800 | 7800-8000 | 8000-8200 | 8200-8400 | 8400-8600 | 8600-8800 | 8800-9000 | 9000-9200 | 9200-9400 | 9400-9600 | 9600-9800 | 9800-10000 | | | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|----------|------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 100% | 99% | 98% | 97% | 96% | 95% | 94% | 93% | 92% | 91% | 90% | 89% | 88% | 87% | 86% | 85% | 84% | 83% | 82% | 81% | 80% | 79% | 78% | 77% | 76% | 75% | 74% | 73% | 72% | 71% | 70% | 69% | 68% | 67% | 66% | 65% | 64% | 63% | 62% | 61% | 60% | 59% | 58% | 57% | 56% | 55% | 54% | 53% | 52% | 51% | 50% | 49% | 48% | 47% | 46% | 45% | 44% | 43% | 42% | 41% | 40% | 39% | 38% | 37% | 36% | 35% | 34% | 33% | 32% | 31% | 30% | 29% | 28% | 27% | 26% | 25% | 24% | 23% | 22% | 21% | 20% | 19% | 18% | 17% | 16% | 15% | 14% | 13% | 12% | 11% | 10% | 9% | 8% | 7% | 6% | 5% | 4% | 3% | 2% | 1% | 0% |

表2 ポーランドへの移民 (2002)

国 名	入国者数 (1,000 人)	移民 (Immigrants) 入国・滞在 (人)	期限付長期滞在 許可者 (人)	就労許可保有者 (左を除く) (人)
ウクライナ	5,853	350	6,816	3,081
ベラルーシ	4,242	130	2,694	880
ロシア	1,844	86	1,908	64
リトアニア	1,398	40	346	174
チェコ	8,313	—	259	430
スロヴァキア	2,126	—	271	270
カザフスタン	—	221	565	97
ヴェトナム	—	124	1,035	947
ドイツ	23,655	2,335	1,566	2,311
フランス	202	247	1,478	1,938
イタリア	185	251	486	807
イギリス	202	208	1,168	1,902
オーストリア	246	156	274	428
オランダ	303	83	414	540
スウェーデン	191	70	468	541
アメリカ	235	1,137	1,160	959
カナダ	—	230	227	239
合 計	50,735	6,587	29,547	22,776

(Ewa Kepinska, 2003 から作成)

バザールは相互にネットワークで結合され、このネットワークに沿ってヒト・モノ・カネ・情報の広域的な空間移動が進められている。

本稿の目的のひとつはポーランドを中心とした移民 (Immigrants) の国内的なフローとバザールの立地・機能の関係について検討することである。もうひとつはバザール経済ネットワークの重要な結節点となっている首都ワルシャワのインフォーマル市場 (10年記念スタジアム) を事例として、新しく形成されつつあるヴェトナム人社会の特徴についていくつかの知見をまとめて報告することである。

これらの課題は移行期社会における新しい問題のひとつとして、地理学をはじめ、社会学・経済学・人口学・政治学などの関連諸科学が積極的な解明に向っているところである。またポーランドのEU加盟への準備の一環として、

EU基準に基づいた移民関係法の整備を迫られたポーランド政府がこうした問題の現代的意味を認識し、政府機関とアカデミズムが密接に連携しながら実態調査と政策立案を進めてきた経過がある。この分野における近年の重厚な研究蓄積はかかる政策的必要性からの要請に応えるべくアカデミズム側の対応としてたかく評価されるものである。

Ⅱ バザール経済ネットワークの展開

1 移民の地理的パターン

ポーランドの地政学的位置は、ヨーロッパ東西をつなぐ移民の流れのなかで統合化を進めている「西」と統合化されない「東」との中間にあって、東西の移民問題に重要な役割をはたしている。とくに1989年以降の移行社会期における移民問題の中心は「東」、とりわけ旧ソ連を構成した国々からの移民にあることは論を俟たない。

ポーランド国内にやってくる移住者（移民）には、大要3つのタイプがある。ポーランドの現実を想定すると、図3のように定式化できる（Jerczynski, M., 1999）。

移民の第1の流れは、ポーランドに流入する移住者がポーランドを長期的に滞在する目的国であり長期間にわたって移住する国と考えている、そのような移住の場合である。このタイプの移住の動機には、ポーランド人との結婚、家族の再統合、国外からの引揚者などさまざまである（Grzymala-Moszczynska, H., 2000, Iglicka, K, 1997）。

第2の流れは、ポーランドが移住の目的国ではあるが、移住者のポーランド滞在は短期間のものであって、一定期間を経てふたたび出国する予定の一時的な移民である。

3つ目は、やはり一時的な滞在者であるが、移住者にとってはポーランドは目的国ではない場合である。これらの移住者にとってはポーランドは経由国であって、ポーランドからみればかれらは通過者ないしトランジット中の移住者である。1990年代初期における通過的な移動の例としては、「西」からのドイツ駐在のソ連軍の撤退があげられるほか、ポーランド西部のソ連軍駐在地から

の撤退もその一部であろう。ぎゃくに「東」からは旧ソ連からのユダヤ人移民が「西」のEU諸国に移住していった。しかし、上図で想定したのは、「東」からの入国者で、「西」のEUをめざしてポーランドを通過中の人びとのことである。この流れはほんらいは一過性のものである。

この3つの流れは移民の合法的ないし公的な流れを意味しているが、同時に移民の流れにはつねに非合法的な要素も介在している。ポーランドの移民問題からみてもっとも重要なのはこの非合法的な移民である。もっとも、合法と非合法は相互浸透的であり、たとえば合法的に入国した移民が滞在期間を非合法的に延長したり、出発国に帰還せずに「西」へ非合法的に移動してしまうなど、さまざまな支流や副流が存在するのがつねである。

ポーランドにとって重要なのは第2のタイプ、おもに「東」からやってくる一時的な移民の動向で、とくに90年代を通してかれらはポーランドの市場経済への移行過程で重要な役割をはたしてきた。

「東」からの移民の流れはさまざまなカテゴリーに分類できるが、注目しなければならないのはこの短期的な移民の流れである。短期的な滞在者の入国目的は、多くは知人訪問、観光、ビジネス、留学などであり、これらが「東」からの入国者の入国目的の55%を占めた。だが、じっさい多くの場合、入国目的とした範囲の外で活動している。入国者に本当の目的を問うと、一時的な非合法の就労、バザールでの商売などが全体の65%を占める。これらはグレー・エコノミーの重要な構成要素である。

図2はポーランドへの入国者、ポーランドからの国外移住者長期的な推移を総括したものである。この国際的移民の長期的推移は、ポーランド国内の政治状況のみごとに反映している。歴史的傾向の山と谷を追うと、たとえば1970年代のギエレク時代は相対的に開放性がつよく、また戒厳令の導入(1981年)以降は国境管理が強化され、国外移住者も入国者も激減した。

いうまでもなく1989年以降の市場経済移行期におけるもっとも顕著な動向は外国人入国者の激増である。外国人の入国者数は1960年代には100万人を超えることはなく、1970年代の開放期を経てもなお500万であった。1980年代後半のベレストロイカ時代を迎え、入国者数の増加の中で東欧革命を経た1990年には一挙に1,820万となった。ポーランドは旧ソ連圏を中心として多数

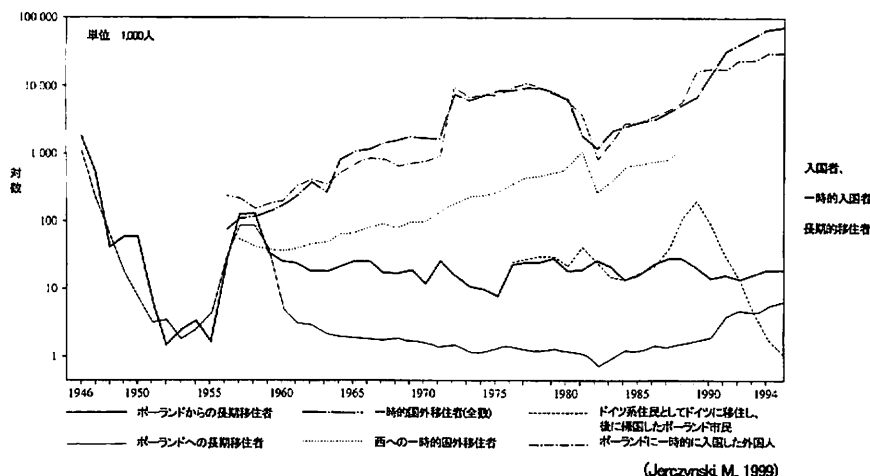


図2 国際的移民の推移 (1946—1994)

の移民を迎え入れる国となった。1990年のポーランドでは、旧ソ連からの移住者の大量流入が大きな社会的脅威とされ、緊急時に予想される数字として1,000万に達するのではないかと懸念されたこともある。

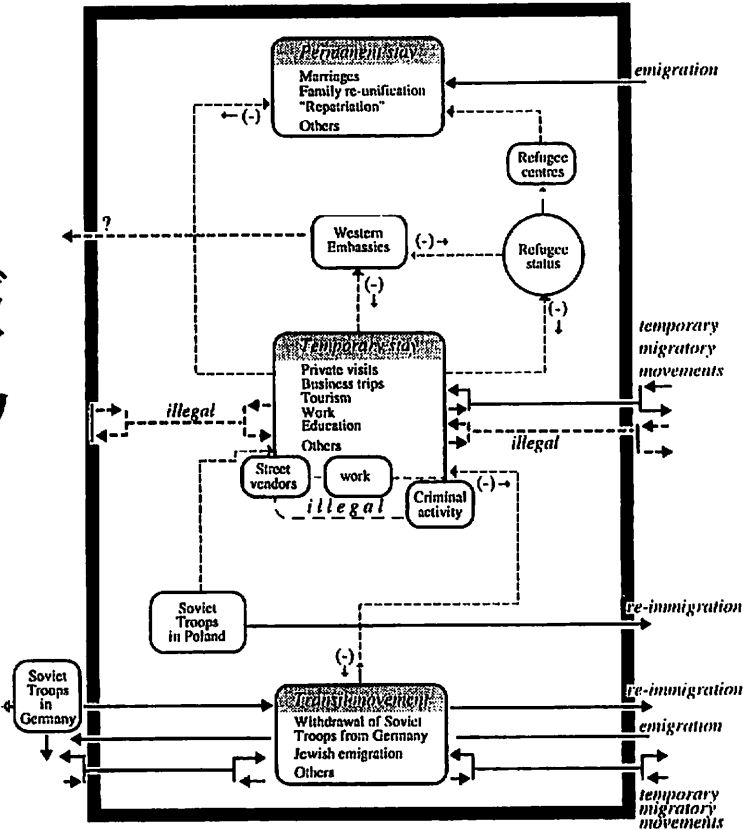
移行期社会にはいって15年間が推移したが、この間における外国人入国者は1990年の1,820万からピークとなった1999年には8,910万となり、以降は移民管理の強化策が実効を示しはじめた2002年には5,070万になっている。

「東」からやってくる移民には4つの主要経路があり、第1次のピークを示した1993年では500万人が入国している(図4 1993年、10,000人以上のみ)。

もっとも重要な国境通過点は、ポーランド東部、テレスポル(Terespol)で、230万の通過者があった。テレスポルはモスクワ・ワルシャワ・ベルリンをむすぶ主要な幹線道路にあり、主要な国際鉄道ルートでもある。第2はポーランド南東部、ベスキド山脈北麓のサン川上流部のメディカ(Medyka)であり、ウクライナ国境に位置する。メディカはオデッサ(Odessa)やルヴフ(Lwow)からのルートに沿っており、このルートはクラクフ(Krakow)、ヴロツワフ(Wroclaw)をへてドイツ南部ザクセンに至る。この国境を120万人が通過している。第3はポーランド北東端の、リトアニアとの国境をなすオグロドニキ(Ogrodniki)で、100万人がこの国境を通過した。4つ目はベラルーシとの国

ドイツ

旧ソ連諸国



(Jerczynski, M., 1999)

図3 移民の3パターン (概念図)

境をなす、クジニツァ・ビャウォストツカ (Kuznica Bialostocka) で、100万人が通過している。この国境はベラルーシ西部の中心都市グロドノ (Grodno) に近い。

ポーランドに入国する「東」からの最大の流入はウクライナ (1993年) であったが、その傾向は2002年現在も変わらず、585万を記録している (以下ベラルーシ424万、ロシア184万、リトアニア140万など)。

旧ソ連からの一時的移住者はひとたびポーランドに入国した後で、どのよう

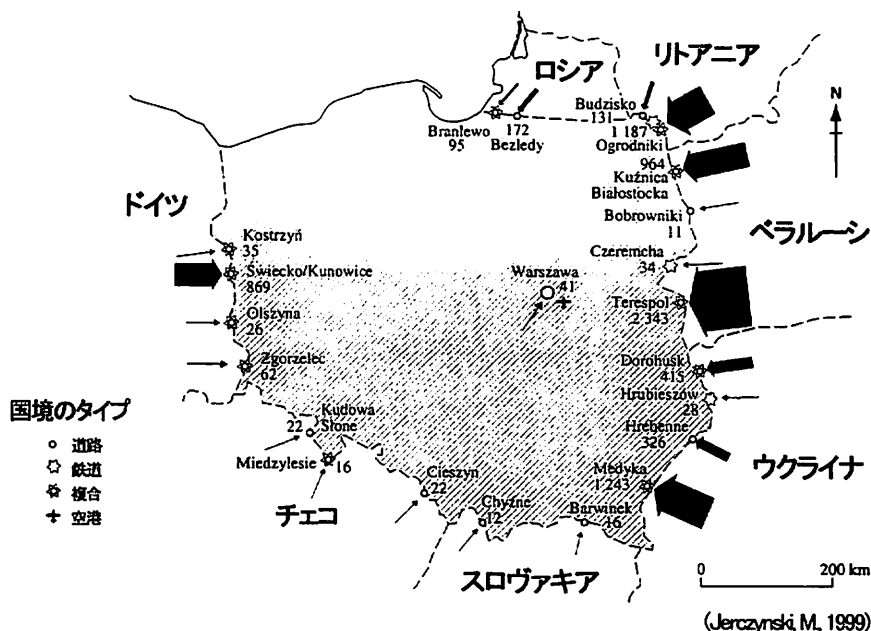


図4 旧ソ連から移民の流れ (1993)

な空間的な移動パターンを示すであろうか。一般的に次のようである。最大グループをなすウクライナ人はとくに大都市の建設業や道路工事などに就労し、また農耕の季節的補助労働として農村に雇用機会を求めることが多い。くわえて、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、アルメニア人などは大都市や各地のインフォーマル・マーケット（バザール）で商人として働き、また一部は卸売業にも従事している。

しかしながら、かれらが3か月という短期的な入国の全期間を同一の場で就労しているわけではない。よりよい条件を求めて、あるいは特定のネットワークをたどって、空間的に移動をくりかえす性向が強い。その移動の経路を追跡することは実際上不可能に近いが、経験的な観察をつみかさねて大胆に全体像を描いたものが図5である（Jerczynski, M., 1999）。

第1は、地理的近接性という説明要因である。ポーランド東部国境の両側の地域間をむすぶ地域住民による小規模な貿易で、基本的に個人ベースで行われ

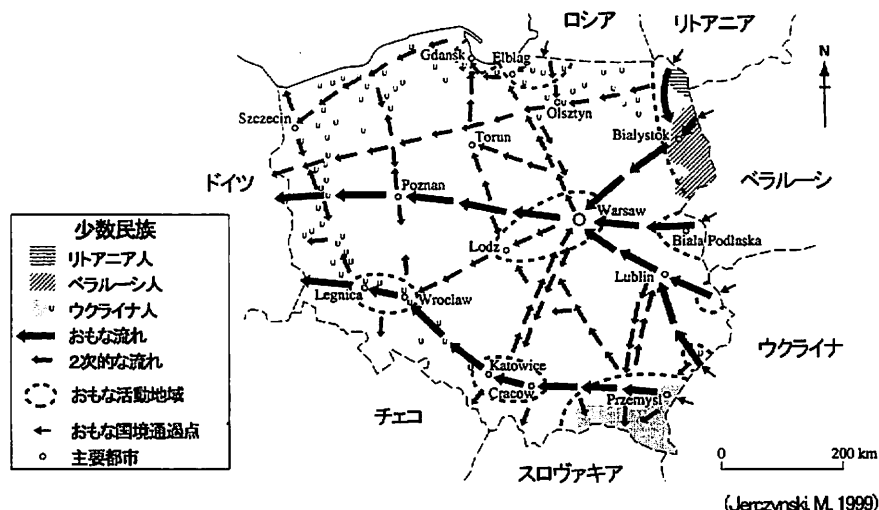


図5 国内移動のパターン

る。当然のこととして、東部国境に近い地域の住民が主力となり、ポーランド東部国境に近い地域や地方都市で販売と購入をくりかえす。行程は乗用車やトラックを使い、日帰りの往復が長くても2～3日で、個人で許される範囲の商品を小規模に売買する。「アリの貿易」、「スーツケース貿易」、「Petty trade」とよばれるこの種の交易は越境貿易のかなりの部分を占める。

地理的近接性の視点で説明可能なもうひとつの形態は、「東」の人びとがポーランド国内の同系少数民族のコミュにティをむすんで交易するというものである。ポーランド北東部には、ベラルーシ人、リトアニア人、タタール人の集落が点在する（図1）。ベラルーシ人がビャウイストク周辺の同系集落をむすぶとか、リトアニアとの国境の両側をつなぐリトアニア人の交易がくりかえされるという例はこれにあたる。

ポーランド南東部カルパティア山麓のウクライナ人やルテニア人（レムコ人）を訪ねて越境してくるウクライナ人の越境貿易もこの近接性を背景にした移動である。また、「東」からの入国者のなかにポーランド系住民が含まれている。かれらは旧ポーランド領が第二次世界大戦の戦後処理でソ連に編入されたときに、そのまま残らざるをえなかった、あるいは選択の余地がなかった人びとで

ある。ポーランド国境警備局の推定では「東」からの入国者の約10%はポーランド系のウクライナ人やベラルーシ人であるという。

第2の要因は、越境貿易の業務が大都市地域に牽引される特質をもっているということである。ワルシャワのスタジアムがその好例であるが、ウーチ周辺の大バザール、南部の上シロンスク地方などのインフォーマルな市場も越境的な貿易と関連している。こうした大都市圏のバザールは卸売機能を介してミンスク（Minsk）、ルヴフ（Lwow）、グロドノ（Grodno）、オデッサ（Odessa）といった中心的な地方都市と結ばれ、より広域的なバザール経済ネットワークの一部を構成している。ここでは、「東」から入国した貨物自動車は国境周辺地域を通過して直接ワルシャワ、ウーチなど内陸部の大都市に入り、大規模な商品売買をおこなう。

3つ目には、旧ソ連軍の駐留地の存在と関連する移動である。旧ソ連軍のポーランド指令本部がおかれていたレグニツァ（Legnica）を核にして、ヴロツワフ（Wroclaw）、イエレニア・グーラ（Jelenia Gora）などポーランド南西部の地域（おもにドルニシロンスク県）に、旧ソ連軍の関係者はソ連軍の撤退以前から将来の経済活動の手がかりを残していった。こうした人びとがいま合併企業の所有者となりビジネスを展開している。なかにはポーランド人との結婚で長期滞在の資格を得てビジネスを継続している。こうしたロシア人による経済活動は「西」へのつながりを維持するチャンネルとして重要となっている（図5）。

4番目のネットワークとして、正教、ギリシャ・カトリックの教会の分布と関連した空間的移動である。現在、ウクライナ人、ルテニア人（レムコ人）はドイツから割譲を受けたポーランド北部と西部の地域に居住していることが多い。それは1947年にウクライナ・パルチザン軍（UPA）とポーランド軍との戦闘を経て、ポーランド政府はカルパティア山麓の国境周辺の地域に居住するウクライナ人およびルテニア人をバルト海沿岸のポモージェ地方、北部のマズール地方などに強制移住させた結果である。

ウクライナ人はポーランドに入国するとウクライナ人コミュニティとコンタクトをとる。国内のウクライナ人コミュニティは正教会を核にして学校、文化施設、行事などで比較的よく組織されている。なかでも西ポモージェ県のジャ

ウィブル（Bialy Bor）という小都市には強力なウクライナ人のコミュニティが存在し、ポーランド内のウクライナ人コミュニティの「首都」とみなされている。短期間滞在のウクライナ人移住者はこうしたコミュニティにやってきて、子どもをその学校において両親は仕事に行くことが多いという。

2 バザール・ネットワークの構造

1989年以降、ポーランドの市場経済化が進展するなかで各地に多くのバザールが急激に発展してきた。越境貿易とそれを支えるバザールのネットワークはポーランド経済の発展に大いに寄与している。もちろん、バザール取引の大部分はグレー・エコノミーの一部を構成するものであるが、各地の地域経済の活性化に大きく貢献していることは否定できない。

社会主義時代にもこうしたインフォーマル・セクターはまったく存在しなかったわけではなかった。こうしたバザールは社会化された流通システムとは別に、それらを補完する役割を担いながら存続し続け、じっさいに供給不足から人びとが入手できなかった商品入手する手段のひとつとして機能していた。1980年代のワルシャワでは、こうした近郊農民の提供する新鮮な農産物を当局の規制外で自由に取引する自由市場が随所に見られたほか、おもに週末にギェウダ（Gielda）と称する当事者間の相対取引の場が乗用車、古カメラ、骨董品、家具など商品ごとに開かれ、にぎわっていた。

経済の自由化、市場経済化の進展とともに、バザール取引はしだいに重要性を失っていくものと当初は考えられていた。この種のインフォーマルな市場取引は社会主義経済の非効率性に対する対応であると思われていたからである。

ところが、移行経済の進展とともに、国境の開放がすすみ消費財の自由な流入でバザール取引の終焉を予測させてきたのとは逆に、バザールの役割はむしろ大きく発展していった。1990年代初期のわずか数年の間にバザール活動の規模はいっそうドラスティックに拡大し、そのテンポはいちじるしいものがあつた。ポーランド国境の開放によって、ひとつに外国からの安価な商品の輸入が可能となり、アジアの発展途上国からの商品が国内製品と競合した。国境の開放ですべての人びとに国境を越えた自由往来が可能となり、外国人のポーランド国内への大量流入を引きおこした。ポーランドと隣接国との間の価格格

差がこの大量流入の契機である。

1990年代初頭のポーランド西部国境（旧ドイツ民主共和国）を越える人びとの移動は、ドイツ人が衣類、食品、生活用品などの消費財を購入するために、ナイセ川を越えて時間・距離ともども短期間の買物旅行に殺到した。かれらの多くは安価なガソリンを満タンにして帰路についた。

西部国境の越境移動では、その性格上、ドイツ人は顧客として必要な商品を購入することが目的であり、自ら商品を売ることはなかった。とはいえ、この越境移動の増大は西部国境地域のバザールの成長をいちじるしく刺激した(Burkner, H., 2002)。

ポーランド東部国境の開放はそれにもましてポーランド各地の地域経済に大きなインパクトを与えた。東部国境の向こう側から大量に流入してきたのは、旧ソ連を構成していたウクライナ人、ベラルーシ人、ロシア人、アルメニア人などであり、ロシア語を共通語とした人びとである。90年代初期のポーランド東部の各都市にはほとんど例外なく「ロシア市場」(Ruski rynek)が存在した。かれらの多くは一般的には列車やバスでポーランドに到着する。鉄道駅の待合室や駐車場で夜間を過ごし、昼間は都心の街路や広場、バザールでもちこんだ安価な商品を販売する。かれらはポーランドで稼いだお金で品物を仕入れ自国で売って利益をうるという両方向からの収益が見込まれたビジネスであった。

しかしながら、ポーランドにおける移民政策の整備、EU加盟準備の前倒し措置などから、旧ソ連からの越境移動の人びとに対する規制が強化され、その一環としてポーランド内での販売目的の商品はもちこみが不可能となった。そこで現在かれらはポーランド中部、ウーチ県の大規模な市場をかれらの卸売業務の基地・拠点として使って、そこから東の国内市場へむけて商品を運んでいる。旧ソ連の国ぐにの経済崩壊と生活必需品を供給する小売ネットワークの不備を補填するため、人びとはやむをえずポーランド製品を求めている。

それと同時に、この消費財供給の不足こそが越境貿易を生み出してきたものであって、旧ソ連の人びとがカーリーニングラードからイスタンブルにいたるまで広範な地域を開拓してきたのである。ポーランド東部と中部の巨大バザール、とくにワルシャワのスタジアムのバザールの売上高を飛躍的に高めてきたのは

じつはこの貿易そのものであった。旧ソ連圏の商人たちが好んで買う商品（衣類など）の多くは今ではポーランド国内の、バザール関連企業で生産されるようになっている。

3 大規模バザールの立地と機能

表3はポーランドにおける18大バザールの取引額，就業者数，外国人顧客の割合，卸売りの割合などを総括的に表示したものである。図6ではそれらの大バザールの分布を図示したものである。

図6と表3によると，売り上げ規模の大きい上位4バザールがいずれもポーランド中央部に位置していることがわかる。マゾヴェツキ県のワルシャワに1（10年スタジアム），ポーランド第2の大都市ウーチに3（Tuszyn, Gluchow,,

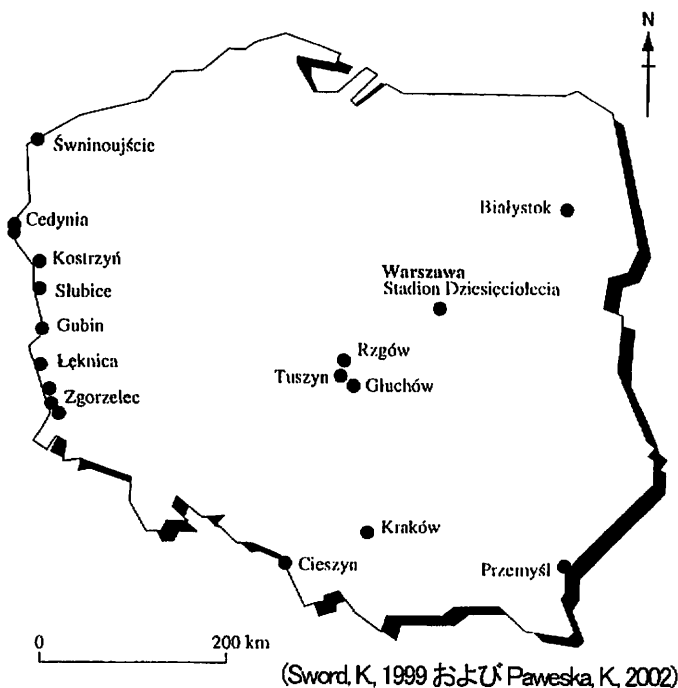


図6 大バザールの分布（2000）

表3 ポーランドの大規模バザール

上段：取引額（100万 PLN）、下段：就業者数（人）

	1995	1996	1997	1998	1999	外国人 比率(%)	卸 売 比率(%)
Tuszyn	1,600 —	1,800 23,700	1,600 19,600	960 25,100	740 12,450	14	67
Stadion Warszawa	1,200 —	1,700 32,000	1,900 33,050	925 28,550	657 11,000	44	48
Gluchow	1,000 —	1,400 14,600	1,100 18,400	670 9,150	— —	5	78
Rzgow	900 —	1,150 11,300	750 13,000	550 6,450	— —	18	48
Leknica	590 —	350 9,800	250 7,100	185 4,600	124 2,100	93	0
Bialystok	460 —	300 8,700	550 6,900	220 5,050	185 3,750	62	21
Osinow Dolny	— —	120 —	230 2,100	230 1,050	— —	90	0
Cedynia	300 —	150 4,600	200 3,950	136 1,950	102 1,300	92	0
Slubice	240 —	270 6,100	150 3,900	100 2,500	— —	94	0
Kostrzyn	170 —	200 3,900	150 3,400	115 2,250	— —	94	0
Gubin	150 —	90 2,400	80 1,450	55 800	— —	88	0
Zgorzelec	130 —	80 2,400	70 2,000	36 1,000	— —	75	0
Krakow	120 —	— —	— —	— —	— —	—	—
Przemysl	86 —	100 2,150	110 1,800	75 2,250	39 1,850	60	15
Swinoujscie	57 —	60 900	50 950	— 3,350	— —	—	0
Cieszyn	52 —	50 2,800	45 1,550	40 3,350	— —	86	3
Przewoz	— —	— —	32 —	25 950	— —	90	0
Sieniawka	— —	— —	19 —	15 800	— —	84	0

(Halina Poweska, 2002 から作成)

Rzgow)である。バザールの経済規模(取引額)で最大を示したのはワルシャワの10年スタジアムのバザールで、1997年に19億PLNの取引額に達した。ついでトゥシン・バザールの18億PLN(1996年)である。これら4大バザールの取引は多様な卸売り業務が中心となっており、相互に国内の他のバザールへの供給者となっている。つぎのランクの2つは西部国境(Leknica)と北東国境(Bialystok)に位置するバザールである。ビャウイストクのバザールはリトアニア、ベラルーシ、ロシアからの顧客に対応しており、1990年代後半にピークを迎え、その後取引額は下降している。

個々のバザールはかなり類似した商品を提供していると思われるが、その場所によっていちじるしい差異が見られる。いずれのバザールでも共通して衣類がもっとも多いが、ポーランド中部の4大バザールではとくに82%と高い。西部国境に添うバザールでは食品、家庭用品、くつなどの比重が高く、衣類は45%と他に比して低いという(Sword, K., 1999)。

外国人顧客に対する売上高の割合も地域差が大きい。西部国境に沿う7つのバザールでは売上げの80~93%が外国人顧客で占められているが、中部の4大バザールではその割合は14~44%、クラクフはわずか1%で国内の顧客がほとんどとなっている。しかしながら、外国人への売上げが大きいのはじつは西部国境に沿うバザールではない。これらはドイツ人の個人消費のための小売りが主で、表3右端に示されるように、外国人顧客への売上高が大きいのは、卸売機能が強いポーランド中部の大規模バザールおよびビャウイストクのバザールである。ここにバザールの個性と地域性が表わされている。

大規模バザールの立地は、図6のようにポーランドの中東部の大都市圏および東西の国境に沿う地域が中心であった。だが、これらを一覧すると大きく地域性が反映したものとなっている。取引額の推移をみると、90年代を通してバザールの発展に応じて売上額を伸ばしてきたのは1996、97年までであって、その後は急速に減少させていることがわかる。また、この変化にも時間的な分化傾向があり、個々のバザール立地の背景との関連に留意する必要がある。

ひとつに、ドイツ国境に沿うバザールでは共通して比較的早い時期(1990年代前半)に越境貿易を発展させ、90年代後半には緩慢な減少傾向を示している。現在も、これらの小都市のバザールに2,000~3,000人が就業しており、

地域経済を支持している。

それに対して、ポーランド中央部の大規模バザール（ワルシャワ、ウーチ周辺）やビャウイストクのバザールは1996/7年にピークを迎え、その後は越境貿易の重要性を急激に低下させている。取引額も雇用数も大きく減らしているが、なお中心的な機能をもっていることにはかわらない。

3つ目に、ポーランド南部のバザールは上記の2つとやや異なった動向を示している。ウクライナ国境のプシェミシル（Przemysl）やチェコ国境のチェシン（Cieszyn）は90年代後半をとおして取引額は小規模ながら安定しており、ともに就業者数のピークは1998年であった。

これらの差異をもたらしたものはそれぞれのバザールの機能の特性である。シフィノウィシチェ（Swinoujscie）からズゴジェレツ（Zgorzelec）にいたるオドラ川を国境とする地域の越境貿易は両国の物価格差をてこにした個人消費の性格が強いものであり、小規模で個人ベースの売買が中心で安定的な商取引がつづけられる。南部のチェシンのバザールも同様にチェコ・ポーランド国境をはさむ地域間の越境貿易によって支えられており、安定的である。

それに対して、ポーランド中央部の大バザールはむしろ卸売り機能に特化する傾向が強く広域的なネットワークの一員として存立しているので、国家間の国境管理や移民政策の制約が大きい。とりわけポーランドの東部国境はたんにポーランドの国境であるばかりでなく、EU全体とEU外の世界とを分かť国境の役割をもつものであり、ポーランドのEU加盟への準備の一環として、ヒト、モノ、カネその他の管理と制限が強く求められてきた。90年代末からの越境貿易の激減はじつはEU加盟への体制整備とふかく結びついているからに他ならない。

Ⅲ ポーランドのヴェトナム人

1 ヴェトナム人流入の背景

ポーランドへの移民の流入は1960年代初期から1990年代はじめまでは、統計的には問題になりえなかった。しかしながら、唯一の例外はヴェトナム人留学生の移動であった。

ヴェトナム人のポーランド流入には、つぎの3つの契機が認められる。第1の契機は、社会主義時代にポーランドとヴェトナム両政府間で社会主義国際協力の一環として学生交換プログラムがむすばれたことである。この学生交流および研究者間の学術交流はその後おおいに発展した。この政府が保証するプログラムによるヴェトナム人学生の流入はピーク時の1972年にはじつに800人に達し、ポーランドの大学を卒業したヴェトナム人は1956年以来4,500人に達している（Halik, T., 2002）。

第2の契機は、1986年にヴェトナムで「ドイモイ」政策が開始され、人びとの経済活動や企業精神に刺激を与えたことである。80年代後半からヴェトナム人の国外での経済活動は活発になりつつあった。第3は、1990年代初頭における一連の政治変革に関連してポーランドおよび東欧諸国の国境が開放され、ポーランドにおける移行期経済と関連した経済的機会がいちじるしく拡大したことである。

社会主義時代のヴェトナム人留学生の大部分は大学卒業後はヴェトナムに帰国し、取得した修了証書や学位などによってヴェトナム社会内でしかるべき地位や役割を享受することができた。

ポーランド危機とそれにつづく戒厳令の時期を経て1980年代末、ポーランドや東欧諸国で一連の政治変革を生来すると、ヴェトナム人の留学生や元学生で帰国せずにポーランドに滞留していた人びとが簡易食堂などの小さなビジネスをはじめていた。1990年代はじめになると、かれらのビジネスに多くのヴェトナム人が参入するようになった。就学後帰国していた元学生、留学生の家族や友人、同郷者たちがポーランドにやってきた。さらにドイツで「ネオナチ」によるアジア人迫害など不安を募らせていたヴェトナム人ガストアルバイターの一部、ルーマニア・ブルガリア在住のヴェトナム人元学生、ヴェトナム人への規則導入後にチェコから移住してきた。こうした人びとがポーランドにおけるヴェトナム人社会の形成の核となった。

1989年以降もヴェトナムは社会主義体制を維持していたが、対外的には積極的な移民政策をとった。かつての学生の多くは特権的な家庭の出身者だったが、現在は仕事と生活を新天地に求める人びとがポーランドをはじめヨーロッパに流入するようになってきた。

とくに1993年末以降、就労許可ヴィザを申請するヴェトナム人の数はいちじるしく増大した。それと平行して、ポーランドに合法的に入国するヴェトナム人も増加してきた。ヴェトナム人は就労許可付きヴィザの認可数で1996年までウクライナ人について第2の大グループとなり、1997年以降は第1位となった。

さらにヴェトナム人の増加の実態は非合法の流入にも関連している。非合法流入者は長期居住許可の申請やポーランド人住民との結婚によって自分の滞在を合法化しようとした。1995年末にはヴェトナム人は居住許可を受けた移民グループのなかで第3位を占めた。1996年には第2位となり、1999年まで維持している。推定では30,000人のヴェトナム人がポーランドで生活している。

2 ワルシャワのヴェトナム人

ポーランドにヴェトナム人がどのくらいいるかを推定することは困難である。かれらは空間的に移動性が高いうえに、法的ステータスの問題があり、公式に登録されている人数は多くの場合滞在者の一部にすぎないからである。かれらの多くは当初はツーリスト（旅行者）として入国して、そのまま認められた期間を越えて残留し非合法に就労する。

ポーランド内務・行政省国境保護・移民・難民局の推定（1990）では、全国で約5万人とされ、CEFMR（移民研究のための中欧フォーラム、2003年）によれば、ヴェトナム移民の規模はピーク時に100,000人と推定された。しかし、時間の経過とともにその数は縮小し、現在は30,000人という（Korys, I., 2003, p.18.）。それに対してポーランドのヴェトナム社会の指導者は、せいぜい1.5万から2万人程度とっている。また、20,000人と確言する識者もみられる。

ポーランドのヴェトナム人は、首都のワルシャワに集中している。そのほか、ウッチ、ボズナン、クラクフなどの大都市にも多くみられるが、小都市や農村にはあまりいない。ワルシャワ市に登録されているヴェトナム人は公式には約6,000人、じっさいには約12,000人と推定されている（Halik, T., 2002, pp.29-30.）。

ヴェトナム人がワルシャワに多く集中する理由は、ワルシャワでは広範囲に

わたって各種の就労機会が多いこと、消費市場の規模が大きく飲食サービスの機会提供というかれらの特技が発揮しやすいという大都市性に関連している。ワルシャワにおけるヴェトナム人の最大の就労の場は10年スタジアムのインフォーマル・マーケットであるが、それ以外にも、ワルシャワにはヴェトナム料理を提供するレストランが30軒ほどあり、バル（Bar）とよばれる簡易食堂は市内各地に300～400軒ほどが点在している。アジア食材店が20数軒、スタジアム周辺だけでほぼ10軒、他にヴェトナム系の企業・貿易商社などが正式に登録してビジネス活動を展開している。

ワルシャワをはじめ多くの大都市では、ヴェトナム人による簡易食堂が一挙にあふれるように増加したのは1990年代初頭のことである。簡易食堂にかぎらず、小規模なバザールが市内の空き地や往来の広い歩道に出現し、バザールは空間の規模に応じて随所に拡大していった。かれらは衣類や日用の生活用品を売ったが、それらの多くは近在必要的な既存の商店の営業と摩擦を起こすことも少なくなかった。

簡易食堂の担い手はヴェトナム人だけではなく、トルコ人のケバブもバル・オリエンタルとして活動した。トルコ人居住者はごく少ないが、トルコ系ファーストフード店はやたらと多いのもワルシャワの街の景観である。ポーランド人もファーストフードの屋台を連ねた。こうして簡易食堂が街中に蘇生したが、じつは90年代初頭の大都市の景観をおおしく変えたものはこうした簡易食堂とともにインフォーマルな小規模バザールが自然発生的にあふれ出したことである。

これらは都市景観的にも食品衛生上からもいくつかの問題点が指摘され、やがて規制の強化につながってきた。近年では許可条件をクリアできた業者が指定された区割りで営業しており、数的にも景観的にもいちじるしく減少している。

ポーランドにおけるヴェトナム人の人数は、ウクライナ人やベラルーシ人に比してけっして多いという数字ではないが、もともとアジア人の在住が少ない社会にあって外見や言語で容易に判別できる民族集団であるため、大都市の街頭ではきわだった存在である。

ワルシャワ市民が国内の移民グループのなかで最大の民族はなににかについて

調査した報告 (Grzymala-Kazloska, A., 2002) によれば, 回答者の63%がアジアからの移民と答え, うち27%がアジア人一般, 26%がベトナム人, その他として中国人4%, 朝鮮人4%であった。多くの市民にはじっさい数的にはより多数を占めるロシア人, ウクライナ人などソ連圏からの人びとよりも, ベトナム人の存在が大きく意識されていることは間違いない。

ベトナム人はポーランド社会とのつよい結びつきをもっている。この点が他の移民グループとの大きな相違点である (Halik, T., Nowicka, E., 2002)。この新しい移民グループのイメージをどのように理解するか, これまでに2つの社会調査が, ワルシャワ大学内の学際的研究グループによって実施されている。それを手がかりにワルシャワのベトナム人グループの一端を理解することを試みる。

最初の調査 (Halik, T., 2002) は2000年3月から4月にかけて, 無作為に協力を依頼した「ふつうの人びと」(ここでは「一般人」と呼ぶ) のうち108名から有効回答を得た。また, ベトナム人大学生・大学院生に対しても同様な調査を実施し25名から回答を得た。あわせて128名の回答に基づく分析である。

なお, アンケート調査はベトナム語によって市内数か所で実施されたが, その中心は10年スタジアム, および隣接するグロホフスカ通りでの調査で, 合計65人から有効回答をえた。くわえて市内3か所 (Plac Zawiszy, Plac Defilad, ul.Gorczevska) でもアンケート調査を実施し, 約20の有効回答をえた。

表4は調査対象者128名の男女別年齢構成を示したものである。全体として平均年齢が35.4歳と若い年齢層に傾斜しており, 学生のみ平均年齢は22.7歳である。とくに30歳以下が67名で回答者の56.3%を占めている。20歳以下の9名は全員が20歳と答えている。かれらのポーランド入国以降の滞在期間は1年未満から10年以上とさまざまである。ちなみに10年以上と答えた7名はすべて学生として過ごした経歴をもつが, 今では大学生でもドクトラント (博士候補) でもない。表5によると, ポーランドのベトナム人移民グループがたえず新来者の到来によって補填されているがわかる。

かれらのポーランド滞在の目的を滞在期間別に表示した (表5)。就学・研

表4 ヴェトナム人(調査対象)の年齢構成

年 齢	一 般	学 生	男 性	女 性	計
～20	4	5	4	5	9
21～25	7	18	17	8	25
26～30	24	0	13	11	24
31～35	17	1	15	3	18
36～40	18	0	15	3	18
41～45	11	0	7	4	11
46～50	10	0	8	2	10
51～55	3	0	2	1	3
56～60	1	0	1	0	1
60～	0	0	0	0	0
無 回 答	8	1	6	3	9
合 計	103	25	88	40	128

(Teresa Halik & Ewa Nowicka, 2002, pp.22-23 から作成)

表5 ヴェトナム人(調査対象)の滞在目的と滞在期間

	一般	学生	無回答	1年未満	2～3年	4～5年	6年以上	計
就学・研究労働	17	24	0	6	10	9	16	41
就業	39	0	0	8	17	8	6	39
家族知人を訪問	29	1	1	7	6	9	7	30
ポーランド人の招待	3	1	0	1	0	2	1	4
その他	1	0	0	0	0	0	1	1
無回答	17	0	2	2	8	4	1	17
合 計	106	26	3	24	41	32	32	132

(Teresa Halik & Ewa Nowicka, 2002, pp.34-35 から作成)

究(41名)と就業(39名)で約70%を占める。家族・知人訪問(30名)がそれにつぎ、無回答が(17名)。一般と学生では滞在目的が明確に異なっている。

つぎにヴェトナムにおける社会階層および学歴と滞在期間の関連をみる。有効回答者(121名)の50%(64名)がインテリ層(ここでは高等教育以上の学歴)で占められており、かれらのポーランドにおける滞在期間は他の社会階層より明らかに長くなっている。かれらの学歴構成はたぶん高いところに特徴がある。基礎教育修了者が3名、中等教育修了者が44名、高等教育修了者

60名、高等教育以上が11名と、回答者の60%が高等教育修了者となっている。学生（25名）のうち18名（72%）はすでにヴェトナムで高等教育を終了している。

かれらのヴェトナムにおける職業構成をみると、工具（14%）がもっとも多く、ついで未就労者（生徒・学生など）10%、商人9%、教員8%、事務員8%、技術者6%、大学教員・研究職5%、仕立て屋4%、運転手3%、軍人3%、その他となっており、かなり幅広い職業従事者の範囲からポーランドに來ていることがわかる。

ヴェトナム人移民の出身地には地域性が大きい。まずポーランドにいるヴェトナム人は歴史的経過やかれらの民族的特性、移民の社会的習性から圧倒的に北ヴェトナム出身者が多い。それも大都市の出身者が多く、一般（有効回答者105名）のうちハノイ（Hanoi）出身者がその3分の1（35名）を占め卓越して多い。ついでハノイ周辺の都市出身者がこれにつぎ、ヌグエアン（Nghe An, 10名）、ナムディン（Nam Dinh, 7名）、タインホア（Thanh Hoa, 5名）、ハドン（Ha Dong, 5名）その他となっている。南ヴェトナム出身者は少ないが、ホーチミン（Ho Chi Minh）出身者が1名含まれていた。学生・院生グループ（回答者22名）をとっても、ほぼ3分の2（14名）がハノイ出身者で、ほかにホーチミン出身者が5名含まれており、ダナン（Da Nang）出身が2名、中国系ヴェトナム人が1名という構成であった。

これらはポーランドにおけるヴェトナム人社会の実像のなにがしかを反映しているが、厳密に言えば、サンプリングの方法や調査を拒否したヴェトナム人、調査中に無回答として集計された人びとの意向といった問題点が指摘がされているように、結果の解釈に検討の余地を残している（Iglicka, K., 2000）。しかしながら、このアンケート調査はかれらの社会意識やポーランド社会との交流などの実態解明が主目的であったので、そのための調査対象の属性をあらかじめ理解しておくという限定的な目的で実施されたことも注記しておく必要がある。

3 10年スタジアムとヴェトナム人

ワルシャワ最大のインフォーマル市場である10年スタジアムは、ワルシャ

ワ中心部から近い、ヴィスワ川右岸のプラガ地区に位置している。このスタジアムは“JARMARK EUROPA”（ヨーロッパ市場）と自称するように最盛期には中欧だけでなくヨーロッパ全域で最大規模の売上げを誇示したこともある。

10年スタジアムはポーランドに社会主義政権が成立して10周年目を記念する目的で建設されたが、予定より遅れて1955年に完成した（社会主義ポーランドの生誕は1944年7月22日にポーランド東部のルブリンで国民解放委員会が成立したことをもって示し、1989年までは7月22日が建国記念の祝日とされていた）。

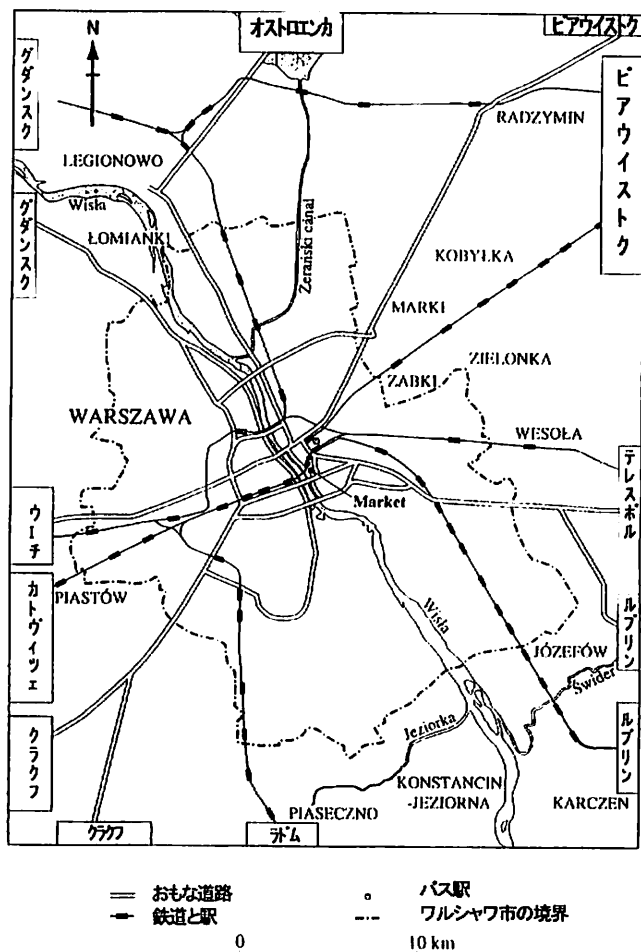
スタジアムは20年にわたって国際的なスポーツ競技場として供用されたが、夜間の照明施設など国際基準を満たさず、またホームとして使用するスポーツクラブも存在しなかったので、しだいに遊休施設となっていた。

1989年、民間企業であるダミス（Damis）社が旧体制の官製組織であった「中央スポーツセンター」から10年契約でスタジアム（30ha）を借地した。スタジアムの都心立地、周辺の広大な駐車スペース、市内の公共交通（市内電車・バス）の充実、国内各地への主要な交通幹線への近接性などから、その商業的活用の可能性に注目した。ワルシャワは幹線道路ネットワークの結節点として、とくに「東」の国ぐにをむすぶ道路交通が利点となった（図8）。

この運動施設のスタジアムを転用した野外バザールは1989年5月にスタジアムの最上部がスタートを切った。当初は週日だけの営業で、珍しいものの好きの市民数100人が集まった。商人は代金を払って売場をわりあてられたが、当初は買い手も入場料を徴収された。

スタジアムのバザールの活動が本格化した90年代初めは、バルツェロヴィチ改革がようやく効果を見せ始めた時期で、ポーランドが市場経済へのドラステイックな移行を進め、国営企業の民営化や非効率な企業のリストラによって大量な解雇と失業者が市場にあふれ出すという移行期初期の厳しい時代と一致していた。

これまでの隠れた失業の表出にくわえて失業者が増大し、移行経済への対応の方策をもてない多くの人びとにとって、バザールでの売り買いという仕事は選択可能で有力なオプションであったかもしれない。国家財政の緊縮化から多



(Sword, K, 1999)

図8 ワルシャワの交通ネットワーク

くの家計支出への支援項目が削減され、家計費が圧迫された。こういう背景をふまえて、当時はバザールの売り手も買い手もふつうの人びとが占める状況が出現した。バザールや道路での売り買いは不十分な家計を助ける歓迎すべき手段であったのである。

しかし、この状況は短期的なものであった。まもなくビジネスのチャンス

求めて旧ソ連から人びとがやってきた。10年スタジアムは当初からポーランド人の商人たちと旧ソ連からやってくる商人たちとのもっとも重要な取引の場となっていた。

現在、スタジアムのバザールは週7日間開かれている。特定の祝日以外は年中無休である。バザールはいまではスタジアム自体の外側に広がっており、スタジアムをとりまく周辺部や駐車スペースにまで及んでいる。

インフォーマル・マーケットとしてのバザールは一般消費者向けの小売り業務と業者向けの卸売り業務の2つの機能をもっている。個々のバザールの規模、地理的位置、バザールのネットワーク上の階層性などの要素でつよい個性をもっている。ワルシャワのスタジアムは、他のバザールに比して規模が大きく、また「東」に広大なヒンターランドを控えていることから強い卸売り機能に特徴がある。

一般向けの小売り商人の活動帯は朝5時から午後1時位までで、一般消費者は9時ころから買い物にやってくる。スタジアムの顧客数は平均1日2～3万人にのぼり、週末はもっとも入場者が多い。現在は平均10,000人といわれている。最盛期には顧客の60%は外国人といわれたが、近年では40%という。

いっぽう、卸売り業務の時間帯は徐々に早まっている傾向にある。東部国境の通過が国境管理の強化で困難となり通過の待ち時間が長大化しているからである(図7)。スタジアムに出入りする「東」からの顧客や業者たちはその出発地(ベラルーシのミンスク、グロドノ、ブジェシチ、ウクライナのルヴフ、キエフなど)から業者が組織した大型バスや貨物自動車でも東部国境を越えて前日の夕方から夜間にかけて到着する。多くは車内で仮眠してすごし、早朝の4時ころから忙しく売り買いの業務に勤しむ。売り買いの規模は顧客の事業種や商品の性格にもよるが、いずれも他への再販売を目的とした卸売りの売買である。出発時間があらかじめ決まっているから、それまでが卸の売り買いのための時間帯ということになる。こうして午前10時には大量の荷物を満載した大型貨物車や大型バスがスタジアムを後にふたたび東部国境を越えて各地に向けて出発するのが観察できる。ワルシャワで買い付けた商品は各地のバザールで売られ、かの地の消費者の需要を満たす。こうした1泊2日の行程をとまなう卸機能がバザールの重要な業務内容となっている。スタジアムはポーランドと

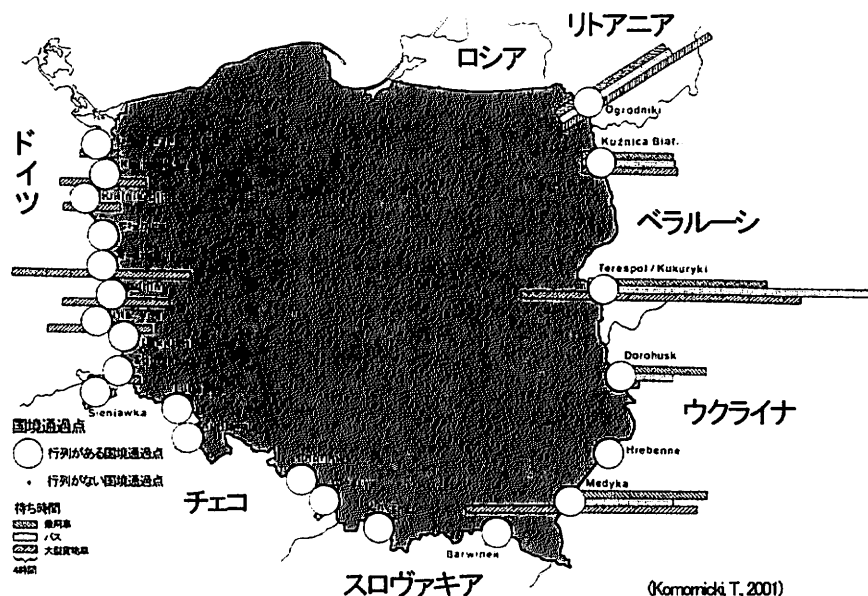


図7 国境通過の平均待ち時間 (1992)

旧ソ連の国々にをむすぶ大規模な物流の結節点の役割を果たしている。

スタジアムを管理するダミス社は、1997年7月、スタジアム内外の場所6,000プロットを募集により貸借させた。さらに割当希望者の補欠として1,000人がリストされた。借地権の保有者6,000人はダミス社にその代金を支払う。借地権保有者はさらにダミス社に土地使用料を支払わなければならない。土地使用料はプロットの種類と質によるが、あるサンプリング調査（1996年、ダミス社の依頼による調査で420無作為のサンプル調査、Sword, K., 1999., p.167.）では1か月70ドル平均であった。最良のプロットとされるスタジアム最上段を占めるのは、テーブルや敷き物の上に商品を並べる、もっとも短期的な商人たちで、家庭用電気製品、道具類、密輸のカセットデッキ、香水、複製したアイコンといったものである。スタジアムの商業的成功の要因はプロットを借用のために商人たちに相当の大金を用意させたことで、ダミス社はこの成功を手がかりに、自動車輸入、電気製品販売、ファーストフード経営、サナトリ

ウムなど経営戦略を多角化している。

この10年スタジামのバザールは中央ヨーロッパ最大規模といわれる。その歴史のなかで取引高が最高を示したのは1997年で、バザール関係の就業者数は3万3,000人にのぼった(表3)。その後はポーランドのEU加盟準備の一環で東の国境管理の強化が進められるにしたがって取引高は低下してきている。いまでも、バザールには事業者5,000社、就業者約10,000人が活動している。

しかし、スタジামが支えている人口は、直接スタジাম企業の雇用されている就業者だけではない。さらにパートタイマーとして約1,000人が就労している。くわえて、もっぱらバザール活動に直接関連する企業に約30,000人が雇用されており、少なくとも業務全体の半分以上がバザール向けの生産という企業に雇用されている就業者は約25,000人という。上記をあわせると、およそ6万人の人口がスタジামの必要を充足させるための雇用ということになる。

スタジামの売上げのほぼ4分の3(73%)は、衣類である。そのほか、くつ(7%)、食品(3%)、香水(2.7%)、家庭用品(2.5%)などである。そのほかにも、電気製品、家庭用掃除機、玩具、自動車アクセサリ、タバコ、スポーツ用品、化粧品、菓子類、CDカセットなどあらゆる消費財に及んでいる。

ワルシャワのスタジামで売られる商品の多くは90年代初期には、ヨーロッパ各地やアジアからの輸入品が中心だった。ヴェトナム人がアジア各地から安価な衣類を中心に大量に買い付け、スタジাম周辺につくられたコンテナ型の倉庫にストックされ、市場の需要に応じて売場に供給するというシステムをとっていた。しかし、商品輸入に対する課税など制約が強まるにともない国内での生産システムの開発を進め、現在では商品の80%(推定)はポーランド国内で生産されている。

1,500以上の企業がスタジামの業者に商品を供給する業務についているが、そのほとんどは小規模な個人経営の生産者である。かれらの多く(約60%)はワルシャワ大都市圏に立地しており、ポーランド第2の大都市ウッチの周辺が15%に及んでいる。輸入品は売上げのわずか12%程度にすぎず、バザールの発展が周辺地域の雇用拡大を誘引している。

1990年代初頭から、ワルシャワのスタジアムに供給される商品の多くは、ワルシャワ東部周辺のゾンプキ (Zabki)、ジェロンカ (Zielonka)、ヴォウォミン (Wolomin) などの近郊都市に無数に蘇生した小さな工場で生産されたものである。その多くはガレージ内で数台の機械を有する縫製・編物・仕立工場からスタートした。現在では、これらの工場経営者は東部国境の隣国ベラルーシやウクライナから数か月サイクルで往来する若い女性労働者を雇用している。かれらはポーランドの賃金水準のほぼ半額で雇用され、その数はジェロンカだけで約1,000人と推定されている。

スタジアムのバザールでは、外国人は売場の商人としても顧客としても参加している。

ポーランド人、ヴェトナム人にくわえて、ロシア人、アルメニア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、ブルガリア人、ルーマニア人、アフリカの商人たちがいる。外国人は公式には借地権の保有はできないことになっている。借地権の保有はポーランド国民かポーランドに長期居住許可（永住権）をもつ人でなければならない。しかし、じっさいには容易に抜け道がみつけれられる規定であって、現に多くの外国人がバザールの商人として売り買い業務に従事している。

スタジアムのバザールはいま3つのセクターに分けられる。おもにポーランド人、おもにロシア語を共通言語とする人びと（旧ソ連の国ぐに）、アジア人（おもにヴェトナム人）のセクターである。こうした3つのセクターは明確に区分されているわけではなく、相互に浸透しあっている。また、取り扱う商品による空間の区分も観察できる。

4 ヴェトナム人社会の特質

さて、スタジアムのバザールのビジネスの中心となった感があるヴェトナム人の社会集団についてすこしく検討したい。つぎの実態調査は時期的にはやや古く1997年に実施されたもので、ヴェトナム人のポーランドへの統合度、ヴェトナム人社会の特徴、ポーランドのヴェトナム人の伝統とポーランドにおけるその変容などに焦点を合わせたものである。ここでは、ポーランドにおけるヴェトナム人の社会生活の現実をうかがい知るという視点で結果を集約する。

調査はポーランドの「ヴェトナム社会文化協会」会員100名（すべてヴェトナム人）を対象に調査表による調査、および回答者の中から30名を抽出した面接調査によるもので、ワルシャワ大学社会学研究所の研究プロジェクトとして実施されたものである。

まず調査対象の100名、ないし30名の属性を示す。大きく肉体労働者、事務職、専門職と分けたとき、30名のうち14名が肉体労働者（ここではバザールの売り手が主）、事務職が9名、専門職が4名、無職が3名という構成であった。調査で明らかになったことは以下のである。面接した30名のなかで24名が既婚者で、家族をヴェトナムに残している。また家族の一部がポーランドに滞在している人が21名である。ここから単身でポーランドに滞在するのではなく、家族の一部とともにポーランドに滞在し、かつ家族の一部を故国に残しているという平均像がうかがわれる。家族をあげてポーランドに滞在する人は4名であった。また、2名がポーランド人と結婚している。

30名のうち24名が子どもをもち、うち21名がポーランドに子どもがいる。全体の4分の3以上（23名）はおもな収入源をバザールにおける小売商にもとめているが、当局に登録した仕事として合法的に就業しているものはわずか3名に過ぎない。

ヴェトナム人同士の社会的関係の強さや程度については、このような結果がでている。毎日、ヴェトナム人同士であっているのは全体の約15%で、週に1回程度あっているが50%、同国人とあうのは月に1～2回程度が19%、それよりさらに少ないが16%である。

ヴェトナム人移民のほとんどが大家族（5～7人）の出身で、多くは家族をヴェトナムに残している。全体の81%がきわめて頻繁に手紙や電話でヴェトナムの家族とコンタクトを取っている。家族や故国との接触が乏しいのは11%である。ここからヴェトナム人社会は大きく2グループに分けられる。ひとつは、ヴェトナムに残してきた家族と密接にむすばれているグループ、もうひとつは家族ぐるみでポーランドに滞在しているグループである。ポーランドに住むヴェトナム人は緊密に結びついた社会を構成しており、一人ひとり孤立しないようにふるまい、ヴェトナムからの仲間、友人、知人とできるだけ多くコンタクトを維持するよう努めている。

ヴェトナム人が同国人との接触を維持する理由としてもっとも重要なのは、生のヴェトナム語を聞くことであるという（回答者の93％、複数回答）。ついでヴェトナムの伝統や習慣を高めること（89％）、79％の人がヴェトナム人コミュニティの雰囲気を感じ起こされることをあげている。また、現実的な要求として、ヴェトナム人の結婚相手を探している独身者（75％）とか、就業機会や生活の情報をえたい（70％）という希望からという理由も指摘されている。

ヴェトナムの文化と伝統の維持について、以下のような傾向が見られる。ヴェトナム人にとって正月（Tet）はもっとも重要な伝統であり、心の安らぐ行事である。ポーランドにいるヴェトナム人もすべて正月行事を大切にしている。ついで重視されているのが、子ども祭（86％）と葬儀（68％）である。これら2つはながい習俗のなかから育まれた行事で、家族と家庭を基礎にした伝統的な儀式である。またヴェトナム国家が定めた公式の祝日というものがあるが、ポーランドのヴェトナム人はそれを祝うことは少ない（39％）。

ポーランドのヴェトナム人はこうした伝統行事をコミュニティの会食や祝賀会という形で祝い、しばしば参加者間でプレゼントの交換や親睦を深めている。また民族の文化や伝統を普及するための講演などがヴェトナム人社会文化協会の主催で開催され、多くの参加者を集めている。

ヴェトナム人はおもにバザールで小さなビジネスに従事する移民グループのひとつであるが、社会的にきちんと組織されており、ウクライナ人やロシア人、アルメニア人などが犯罪などに巻き込まれることが多いのとは対照的である。

ヴェトナム人はポーランド社会の伝統的な価値や規範を受け入れ同化しようとしている。かれらは子どもたちをポーランドの学校に通わせ、ポーランド語を習い、ポーランド語の新聞を読みテレビ番組をみている。多くのヴェトナム人はポーランド人の家庭や家族と接触をもっている。それはごく自然のことであるが、またヴェトナム人がポーランドを長期間にわたって居住したい国と考えていることでもある。

しかしながら、ヴェトナム人は社会的によく組織されたコミュニティをもっているが、その特徴は対外的には自らの存在を柔軟に順応させると同時に、内部的にはかれら自身の文化や伝統をつよく維持しかれらの個性を育てているこ

とである。

ヴェトナム人のつくるコミュニティには明確な階層性（ヒエラルキー）が認められる。コミュニティ内の個々人の立場や位置は、おもに①ヴェトナムにおける教育と社会的地位、②ポーランドにおける合法的地位、③ポーランド文化への適応性（ポーランド語と文化の知識）、④ポーランド社会への統合度、⑤ポーランドにおける社会的経済的地位などできまってくる。

ポーランドのヴェトナム人社会がなぜこのような高い自治組織をつくりあげたのかは興味深い問題である。

現在の指導層はかつてのポーランド留学生・研究者の第1世代であり、じじつヴェトナム人社会の中心はまぎれもなくかれらが担っている。「ポーランド・ヴェトナム社会文化協会」は200～300人の元留学生とその家族からなるコミュニティのエリート層が中心となっているが、かれらは長い期間ポーランドに居住し、ポーランドの市民権や少なくとも長期的居住権をもっている。また、多くはポーランド女性と結婚し、ポーランド語や文化を理解し、ポーランド社会とふかくむすびついている。かれらの中から第2番目の組織である「ポーランド・ヴェトナム友好と連帯協会」の中心的役割を果たす人材が送られている。この団体はヴェトナム系移民の全体を組織し、地方にいくつかの支部をおいて活動している。

かれらリーダーたちは、当初から自らのイメージについて強い関心をもっていて、プラスのイメージをおしだす努力を熱心にすすめてきた。かれらはポーランドのジャーナリスト、政治家、研究者との会見によることで応じ、自らの役割について積極的に説明してきた。これまでの主張では、ヴェトナム人のバザールにおける活動を通してポーランドにあたらしい雇用を拓いてきた、市民に安価な商品やサービスを提供してきた、ポーランド文化の幅を拡大してきた、チャリティ活動でポーランド人を援助する、ヴェトナム人に対するメディアの誤った情報を是正するなど広範囲な貢献をしてきたという。

スタジアムにはヴェトナム人の売り場が少なくとも1,200（Grzymala-Kazlowska, A., 2002）はあるという。10年スタジアムはヴェトナム人にとっては重要な就業の場所であるばかりでなく、生活上の拠点である。ヴェトナム人の一定の部分はスタジアムの周辺地域で生活している。そこには、コーヒー

ショップがあり、ヴェトナム生鮮食材店や、バザール客とヴェトナム人を顧客とする食堂が約20軒以上はある。ヴェトナム語の日刊紙が3紙発行されており、ヴェトナム人向けの医院、美容室、レンタルビデオ店などをもっている。

ヴェトナム人はここで情報を交換し共同でマーケット戦略をつくり、また社会的文化的なイベントを企画し基金をたちあげている。スタジアム周辺には明らかにヴェトナム人コミュニティが形成されている。ポーランドのヴェトナム人は、高いレベルの協力と自治組織をもつ自律的な民族集団としての特徴をもっている。そこに拠るヴェトナム人は既存のヒエラルキーを尊重し、相互に協力することが義務となっており、もめごとはほとんどがコミュニティの内部で解決されている。ポーランドのヴェトナム人社会は、その内部に自分たちの利益と相互関係を維持発展させる必要から密接な組織と関係をつくりあげてきた民族集団である。

Ⅳ おわりに

本稿では1989年以降のポーランドの新しい社会経済システムへの移行のなかで、これまでに移民(Immigrants)の増加とその役割を、旧来の少数民族問題との関連や新しい移民社会の形成といった視点から考え、とくにアジアからの移民としてヴェトナム人社会についてとりあげてきた。

これまでの検討をふまえて、このヴェトナム移民がEU加盟後のポーランド社会の動向と関係づけてどのような方向に発展していくかについて、さいごに付言しておきたい。

ヴェトナム人社会の研究でもっとも注目すべき成果はワルシャワ大学の移民研究グループのハリク教授らの仕事である。教授らはヴェトナム人社会の将来について4つのシナリオを提起している(Halik, T., 1995, 2000; Grzymala-Kazłowska, A., 2002; , Iglicka, K., 1999)。

第一に、ポーランドのヴェトナム人社会の中心が、若い年齢層で教育程度が低く非熟練労働力(非合法移民も含めて)のまま推移する場合、ヴェトナム人移民は所期の目的(経済的に金を稼ぐ)を果たした後に故国に戻るか「西」へ

移民するいずれかの選択となる（図3のTemporary stay）。その場合、ヴェトナム人移民は減少ないし安定化する（あらたな流入者を加味した場合）。

第二に、ポーランドのヴェトナム人（非合法移民も含めて）が長期的滞在許可（PRP）をもち、「西」にいるヴェトナム人とのネットワークをもっている場合、かれらはポーランドでの滞在を“Transit movement”とみなし、ポーランドの友好的な環境と寛容な雰囲気謳歌しつつカネを稼ぎながら居住権の取得をまち、「西」への入国の機会をまつことだろう（図3の下段）。

第3のシナリオは、ポーランドのヴェトナム人を現状のまま安定化させ、長期的滞在許可数を漸増にとどめるというものである。換言すれば、ヴェトナム人をポーランド社会から隔離して孤立化させることで、安定化を図るというものである。言語の障壁があつてヴェトナム人のポーランド文化への接近が円滑に進まない場合には、ヴェトナム人は内的な社会生活を強め、ポーランド社会から孤立化の方向に進むというものである。

4番目は、ポーランドのヴェトナム人をポーランド社会に徐々に同化させようとするものである。ポーランドで生まれたヴェトナム人子弟が親世代の言語の障壁に対して橋渡しの役割を担い、ポーランド文化とのつながりを強めていくことで相互交流を促進させ社会的統合へと進んでいくだろう。かれらの若い世代がヴェトナム人社会の中心を担うようになれば、ポーランド語と文化の広がりのおかげで、ヴェトナム社会の内部の結びつきが弱体化し、より深い社会的統合が実現していくというものである。

まずヴェトナム人社会の将来について統合化と孤立化という二分法ははたして妥当であろうか。ニューカマーとしてのヴェトナム人社会が強力なポーランド文化の大海のなかで存続しうる条件はいかなるものかを考えるべきであろう。じっさい、ベラルーシ人やリトアニア人の社会が存在するのは、そこに言語・文化・制度などの実質が社会的に整備され、生活の拠点としてコミュニティが確立しており、かつ比較的近いところに民族分布の本体が存在し、たえず情報の交流が可能であるということが前提となっている。ヴェトナム人が故国からとおく離れた空間でポーランド人の大海のなかで同化されずにかれらのコミュニティを維持できるであろうか。

これらのシナリオはヴェトナム人社会の将来像を予測するいくつかの選択肢

のなかで提起されたものであり、論者が指摘するように、じっさいにはこれらのシナリオが融合したコースをたどるのではないと思われる。

しかしより重要なことは、ヴェトナム人移民の問題はポーランド政府の移民政策に対する基本姿勢にかかわる要素であって、移行期社会における新しい移民 (Immigrants) に対してEUの一員として基本的なフレームをどのように構築するかにかかわっている面が大きい。もちろん論者らが指摘するように、時間の経過が問題の解を導き出すことはたしかではあろうが、移民に対する基本的なスタンスを確立しより望ましい政策選択に直面している現代ポーランド社会の切実に迫った政策課題としてよりふかい論議が迫られているといえる。

[2004年11月9日稿]

【謝辞】 (Acknowledgment)

本研究を進めるにあたり、以下の方がたのご協力をいただいた。ここに謝意を表するものである。

Prof. Dr.hab. Grzegorz Weclawowicz (IGiPZ PAN), Prof. Dr.hab. Zbigniew Taylor (IGiPZ PAN), Dr. Marek Jerczynski (IGiPZ PAN), Dr. Jacek Wan (NNN), Prof. Teresa Halik (Instytut Orientalistyczny UW), Edward Osiecki (Wspolnota Katolikow Wietnamskich)

【文献】

- ・ Burkner, Hans-Joachim (2002): Border Milieux, Transborderly Communication and Local Conflict Dynamics in German-Polish Border Towns: The Case of Guben and Gubin. "Die Erde", Vol.133, ss.69-81.
- ・ Debkowski, Cezary (2004): "Polak za granica", Polska Agencja Informacji i Inwestycji Zagranicznych S.A. 566ps.
- ・ Eberhardt, Piotr (2002): Ethnic Problems in Poland and in her Eastern Neighbours, "Geograficky Casopis", Vol.54, No.3, pp.191-201.
- ・ Eberhardt, Piotr (2003): "Ethnic Groups and Population Changes in Twentieth-Century Central-Eastern Europe: History, Data, and Analysis", M.E.Sharpe (New York), 592ps.
- ・ Grzymala-Kazlowska, Aleksandra (2002): The Formation of Ethnic Representations: The Vietnamese in Poland, Sussex Migration Working Paper no.8 (Sussex Centre for Migration Research), 17ps.

- ・ Grzymala-Kazłowska, Aleksandra & Okolski, Marek (2003): Influx and Integration of Migrants in Poland in the Early XXI century, *Prace Migracyjne*, nr 50, ISS UW, 54.ps.
- ・ Grzymala-Maszczyńska, H. (2000): Poles from Kazakhstan: A Strategy for Coping with Accumulation 'Back Home', in Hamilton, F.E.I. and Iglicka, K. co-ed: "From Homogeneity to Multiculturalism", *SSEES Occasional Papers No.45*, pp.207-224.
- ・ Halik, Teresa (2000): Vietnamese in Poland: Images from the Past, Present and Future, in Hamilton, F.E.I. and Iglicka, K. co-ed: "From Homogeneity to Multiculturalism", *SSEES Occasional Papers No.45*, pp.225-239.
- ・ Halik, Teresa (2001): The New Pattern of Vietnamese Migration, in Dacyl, J.W.: "Challenges of Cultural Diversity in Europe", pp.189-214.
- ・ Halik, Teresa & Nowicka, Ewa (2002): "Wietnamczycy w Polsce Integracja czy izolacja ?", *Instytut Orientalistyczny Wydział Neofilologii, UW*, 206ps.
- ・ Hamilton, F.E.I. & Iglicka, Krystyna (2000): "From Homogeneity to Multiculturalism; Minorities Old and New in Poland", *SSEES Occasional Papers, No.45*, 288ps.
- ・ Hamilton, F.E.I.(2001): Globalizacja a lokalny rozwój ekonomiczny: w sprawie zmian na przygranicznych terenach Wschodniej Polski, *Studia Regionalne WSE w Białymstoku*, nr 1, ss.31-56.
- ・ Iglicka, Krystyna (1997): The migration of Kazakhs of Polish origin from Kazakhstan to Poland: Are they fellow-countrymen or not ?, *Prace Migracyjne*, nr 13, ISS UW, 17ps.
- ・ Iglicka, Krystyna & Sword, Keith co-ed.(1999): "The Challenge of East-West Migration for Poland", *SSEES, Univ. of London*, 237ps.
- ・ Iglicka, Krystyna (2000): Migration movements from and into Poland in the light of the East-West European migration, *Prace Migracyjne*, nr 33, ISS UW, 27ps.
- ・ Iglicka, Krystyna (2000): Immigrants in Poland: Patterns of Flow, in Hamilton, F.E.I & Iglicka, Krystyna co-ed: "From Homogeneity to Multiculturalism", *SSEES Occasional Papers No.45*, pp.167-185.
- ・ Iglicka, Krystyna (2000): The revival of ethnic consciousness: a case of Poland, *Prace Migracyjne*, nr 31, ISS UW, 29ps.
- ・ Iglicka, Krystyna (2000): Ethnic division on emerging foreign labor markets in Poland during the transition period, *Prace Migracyjne*, nr 35, ISS UW, 34ps.
- ・ Iglicka, Krystyna (2001): "Poland's Post-War Dynamic of Migration", *Ashgate (Aldershot)*, 146ps.
- ・ Iglicka, Krystyna (2001): Poland: Between Geopolitical Shifts and Emerging Migratory Patterns, *Prace Migracyjne*, nr 42, ISS UW, 22ps.
- ・ Jerczynski, Marek (1999): Patterns of Spatial Mobility of Citizens of the Former Soviet Union, In Iglicka, K.& Sword, K.: "The Challenge of East-West Migration

for Poland", pp.105-119.

- Kepinska, Ewa & Okolski, Marek (2002): "Recent trends in international migration Poland 2002" , Prace Migracyjne, nr 48, ISS UW, 83ps.
- Kepinska, Ewa (2003): "Recent Trends in International Migration Poland 2003", Prace Migracyjne, nr 52, ISS UW, 85ps.
- Kitowski, Jerzy (2000): "Eastern Border of European Integration Processes", Papers and Monographs, Dept. of Economy, Rzeszow, 809ps.
- Kitowski, Jerzy (2003): Eastern border of European Union –Opportunities and Threats–, "Geopolitical Studies IGiPZ PAN" vol.11, pp.95-111.:
- Komornicki, Tomasz (1999): Granice polski analiza zmian przenikalności w latach 1990-1996, "Geopolitical Studies" IGiPZ PAN, vol.5, pp.1-346.
- Komornicki, Tomasz (2001): Changes in the Role and Permeability of Polish Borders, "Geographia Polonica", Vol.74, No.1, pp.77-100.
- Korys, Izabela (2003): "Migration Trends in Selected EU Applicant Countries: Poland", CEFMR Working Paper, 5/2003, 107ps.
- Lodzinski, Sławomir (2000): National Minorities and the 'Conservative' Politics of Multiculturalism in Poland after 1989, in Hamilton, F.E.I & Iglicka, Krystyna: "From Homogeneity to Multiculturalism", SSEES Occasional Papers No.45, pp.34-66.
- Okolski, Marek (1997): "Recent trends in international migration Poland 1996, Prace Migracyjne, nr 16, ISS UW, 52ps.
- Okolski, Marek (1999): Migrant trafficking in Poland ~ Actors, mechanisms, combating ~, Prace Migracyjne, nr 24, ISS UW, 97ps.
- Okolski, Marek (1999): Poland's migration: growing diversity of flows and people, Prace Migracyjne, nr 29, ISS UW, 28ps.
- Okolski, Marek (2000): Recent trends in international migration Poland 2000, Prace Migracyjne, nr 32, ISS UW, 52ps.
- 中村賢二郎 (2002) : EU 東方拡大政策下の中東欧諸国の移民・ビザ制度(1), 「高松大学紀要」, 第34号, pp.133-190.
- Poweska, Halina (2002): Przestrzenny Wymiar Handlu Transgranicznego w Polsce w Ostatniej Dekadzie XX Wieku, "Geopolitical Studies" IGiPZ PAN, vol.9, pp.1-118.
- Rosciszewski, Marcin (1995): Geopolitical Patterns of Contemporary Poland, "Geograficky Casopis", Vol.47, No.1, pp.39-44.
- Rosciszewski, Marcin (2002): Polish Eastern Border. Some geopolitical Patterns, Conference papers 22, IGiPZ PAN, pp.15-31.
- Snoeren, Klaartja (2001): The Merchant of Dziesięciolecia Stadium, "Euro Views" (May 1, 2001),

- ・ Snoeren, Klaartja (2001): Migration, no thank you ! ~ Poles are not willing to move to the West anymore ~, "Euro Views" (May 4, 2001),
- ・ Sword, Keith (1999): Cross-Border 'Suitcase Trade' and the Role of Foreigners in Polish Informal markets, in Iglicka, K. & Sword, K.: "The Challenge of East-West Migration for Poland", pp.145-167.
- ・ 山本茂・ヤツェク・ヴァン (2004) : EUの東方拡大とポーランドの「ヨーロッパ回帰」～「EU25」の現場で考える(1)(2)～, 「地理」, Vol.49, No.7, pp.100-106., No.8, pp.90-98.